



武汉大学滞在記



福島県立医科大学医学部 4年 橋本舞

1. はじめに

わたしは2015年3月2日から3月27日までの26日間、中国湖北省にある国立武漢大学へと留学させていただきました。武漢での生活は毎日が驚きと発見に溢れていました。わたしが武漢で見たこと聞いたこと感じたことを、このレポートに書きたいと思います。中国に行ったことのない人にも、このレポートを通して中国のこと、そして中国から見た日本のことをお伝えできればと思います。

2. 武漢市と武漢大学について

武漢市は中国湖北省にある大きな都市で、湖北省の省都でもあります。湖北省は名前の通り湖が大変多く、武漢市内にも東湖という大きな湖があり、武漢大学はこの東湖のほとりに位置しています。飛行機からも沢山の小さな湖が見えました。

武漢市には『武漢三鎮』と呼ばれる3つの地域があり、それぞれ武昌、漢陽、漢口と呼ばれています。武漢三鎮は、武昌は文化教育区、漢陽は工業製造区、漢口は商業貿易区として、それぞれの特徴を生かし発展してきました。武漢大学は文化教育を担う武昌にあります。



中国における
湖北省(赤)と武漢市の位置



国立武漢大学は中国でもっとも歴史のある大学のひとつで、その前身である「自強学堂」は清朝末期に創立されました。珞珈山を背に東湖を臨む武漢大学は「中国で最も綺麗な大学」と評され、また、桜の名所としても有名です。この桜は日本から贈られたものであり、武漢大学の歴史ある建物を背景に咲き誇る桜は本当に美しかったです。

武漢大学医学部は、2000年に湖北医科大学が合併して誕生しました。基礎医学院、第一・第二臨床医学院、公共衛生学院、薬学院、口腔医学院、HOPE 護理学院からなり、基礎と臨床で学部が分かれていること、公衆衛生学が独立していること、薬学部も含まれていることなど、多くの点で福島県立医科大学とは異なります。3つの附属病院を持ち、医学部キャンパスの隣には第二附属病院である中南病院が併設されています。

武漢大学は非常に国際色豊かな大学で、現在までに累計50カ国以上から留学生を受け入れています。医学部にも沢山の留学生が在籍しており、留学生のために英語での講義も行われています。福島県立医科大学とは、1999年(当時は湖北医科大学)に交流協定を結んで以来、お互い教員や学生を派遣して関係を深めてきました。医学部キャンパスにいる日本人はわたしたち4人だけで、しかも4週間と短い留学だったので、とても珍しがられました。

3. 武漢大学での生活

(1)迎賓楼

留学中は医学部キャンパス内にある「迎賓楼」と呼ばれるゲストハウスに滞在していました。部屋はツインルームで、エアコン・トイレ・シャワー付きですが、湯船はありません。エアコンはあるものの効きが良くなく、3月上旬は寒さが厳しいので、湯たんぽやヒートテックインナーなどを最大限に活用して寒さをしのいでいました。部屋によって電波の強さにかなり差がありますが、一応 Wi-Fi が使えました。

(2)学生食堂

食事は医学部キャンパス内の学生食堂で食べていました。メニュー豊富で盛りよし、味よし、しかも低価格！と、本学の学生食堂と比べると対照的でした。学生一食堂と学生二食堂があり、後者では中華料理に加えインド料理やウイグル料理も楽しむことができます。

(3)売店

中国は日本と異なり水道水を飲むことができないので、飲料水は医学部キャンパス内の売店で購入していました。ホテルから向かって一番手前の売店「富强超市」がお勧めです。この売店では日常生活に必要なものは大体揃っていて、毎日お菓子や飲み物を買に行きました。新鮮な果物も沢山売っています。売店のおばちゃんが電卓で一つ一つの金額を教えてくださいるので、中国語が分からなくても安心して買い物ことができました。おばちゃんとは仲良くなり、最終日に「明日日本に帰ります」と伝えると、写真を一緒に撮ってくれて、お菓子をくれました。



(左)「富强超市」という、強そうな名前の売店

(右) 最終日に、売店のおばちゃんと

(4)トイレ

トイレは日本に比べると汚く、トイレットペーパーがないことも珍しくありません。必ずポケットティッシュを携帯してトイレに行き、使った紙は流すのではなく、備え付けのゴミ箱に捨てます。使った紙がゴミ箱に入っているのはあまり気持ちのいいものではありません。日本に帰国して最初にトイレに入ったときは感動しました。日本のトイレは最高です。

(5) ネット事情

Wi-Fi は迎賓楼や Lab などを使用することができました。

中国は規制が厳しく、LINE や Facebook、Twitter などの SNS は使えません。中国では WeChat(中国語で“微信”)や QQ といった SNS が普及しています。わたしたち 4 人は事前に日本で WeChat をダウンロードしていたので、現地では WeChat を使って連絡を取り合っていました。WeChat は音声通話やテレビ電話もできるので、日本にいる家族との連絡手段としても大変便利でした。

Apple 製品に関しては、VPN をダウンロードすることで LINE や Facebook、Twitter などの SNS が使えるようになりました。

(6) 大気汚染

大気汚染については留学前から心配していましたが、やはり最初の数日間はその軽い痛みを感じました。大気汚染の程度は日によって異なり、青い空を見られる日もあれば、少し遠くの建物すら見通すことができないほどひどい日もありました。現地の人々も大気汚染については気にしているようで、日本から来たわたしたちの体調も気遣ってくれました。しかし、街中を歩いていてもマスクをしている人はほとんど見かけませんでした。

4. 中国人学生

中国人の学生たちと交流してみて、まず彼らの英語の流暢さに驚きました。日本語に比べ中国語のほうが母音の発音の種類が多いため、たしかに中国人のほうが正確な英語の発音を習得しやすいという面もあります。しかし、それを抜きにしても英会話力は日本の一般的な学生よりも上だと感じました。ちなみに、何人かの友達には「日本人は英語を書く能力は素晴らしいのに、話すことは苦手だよ」と言われ、なるほどと思いました。話す力をもっと伸ばすような英語教育が必要だと感じました。とにかく、グローバルな分野で戦える人材は、英会話力という点で日本人が中国人に劣っていることは間違いないと感じました。

また、中国人学生の勤勉さとハングリー精神には圧倒されました。中国人クラスは朝の 8 時から、夜は遅い日で 22 時頃まで講義があるそうです。これは大学生に限ったことではなく、高校生についても同様で、「部活なんてやってる暇ないヨ!」と言っていました。また、将来のビジョンを具体的に持っている学生が多く、実現するために何が必要なのか、今何をすべきなのか、きちんと考えて毎日過ごしているという印象を受けました。日本は中国に比べると恵まれた環境だと漠然と思っていましたが、学問にひたむきに取り組む彼らを見ていて、日本人のその余裕のようなものが学問への必死さやハングリー精神を削いでいるのではないかとさえ感じました。

5. 中国から見た日本

留学する前は、中国人は日本のことを嫌っているのではないかと思っていました。尖閣諸島などをめぐる政治的な対立も近年深刻化し、メディアなどを通して見てきたいわゆる“反

日”な中国人の姿が自分の中の中国人像になっていたからです。でも、実際は中国人の“反日”感情は思っていたほど強くはないように感じましたし、特に若い世代の人々は日本人である私たちに嫌悪感ではなくむしろ興味を抱いているようで、わたしたちが日本人だと分かるとみんな日本のアニメの話をし始めました。中国に行く前は、アニメや漫画を日本の文化と認識することはありませんでしたが、中国の若者が皆日本のアニメや漫画を愛し、そこから日本に興味を持ってくれていることを知り、アニメや漫画は日本の誇れる文化だと思いました。アニメや漫画が日本と中国の若者の架け橋となっていると言っても過言ではないと思います。

6. 武漢大学での学び

わたしと田中翔子さんは、薬学院 (Pharmaceutical Science) の薬物分析学研究室 (Pharmaceutical Analysis Lab)にお世話になりました。もともと本学の薬理学講座で研究していて、武漢大学でも薬理学の Lab への配属を希望していたのですが、武漢大学の Lab に行ってみて初めて自分が薬学院に配属されたことを知りました。教授のお話によると、わたしたちの希望は医学部の薬理学研究室でしたが、薬理学研究室は人が少ないことや英語を話せる人が少ないことから、人数も多く英語を話せる人の多い薬学院の薬物分析学の Lab に変更になったのだそうです。実際、Pharmaceutical Analysis Lab は在籍人数が 20 人ほどの大きな Lab で、under-graduate から post-graduated まで様々なレベルの学生がそれぞれ異なる研究テーマを持って熱心に実験に取り組む、大変活気ある Lab でした。また、英語の教育にも力を入れているようでした。



Lab では教授の Chen 先生から 2 つの課題を出されました。

一つ目は、研究室に在籍する全員に、研究内容について質問し、説明を受けることです。薬理学は biology の分野であるのに対し、

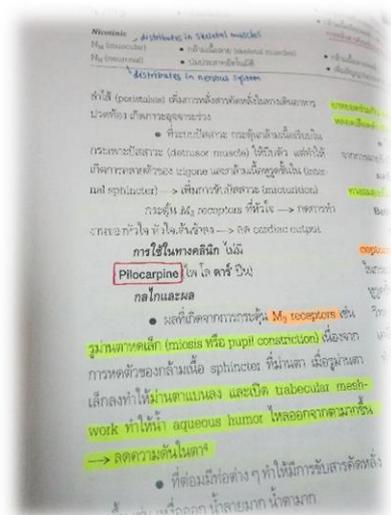
薬学は Chemistry の領域であり、彼らの研究内容を理解するのはとても難しく、苦労しました。一人ひとりにお話を聞いていくうちに、混合物からの目的成分の抽出・分析や、新薬となりうる成分のスクリーニングなどが Lab の皆さんの主な研究内容だと分かってきました。理解できると薬物分析の分野は面白く、また、医学と薬学でアプローチの仕方は違うけれど、病気に苦しむ人を助けたいという目的は同じなのだと感じました。

二つ目は、自分が興味を持った研究内容の人と一緒に研究を行い、3枚程度のレポートを提出することです。私は Cathepsin B Inhibitor をスクリーニングしている Han Jing さんから実験方法を学び、実際に少し手伝わさせていただきました。なぜ Han Jing さんの研究に興味を持ったかという、この Cathepsin B Inhibitor は新たな抗がん剤として注目されており、医学部で学んできた知識を生かすことができそうだと感じたからです。



Pharmaceutical Analysis Lab の皆さん

Cathepsin B は健全な人間の体内にも存在するタンパク質分解酵素ですが、癌の病変部では正常よりも高値を示し、癌細胞の浸潤・転移を促進することが分かっています。ですから、Cathepsin B を阻害することで癌細胞の浸潤・転移を抑制できる、ということなのです。実際はまだスクリーニングをするための装置を準備している段階でしたが、いつか Han Jing さんの研究が癌患者の治療に役立つかもしれないと思うと、一緒に研究していてワクワクしました。英語でのレポートを書くのは正直とても大変でしたが、実験で用いた CEC(Capillary Electro Chromatography)や Cathepsin B について深く学ぶことができ、自分の英語の練習にもなり、取り組んでよかったです。



タイ語の教科書

Lab での研究に加え、Chen 先生にお願いして留学生クラスの薬理学の講義にも出席させていただきました。武漢大学医学部では2年生で薬理学を習うということで、わたしたちも医学部2年留学生クラスの薬理学講義に混ぜてもらいました。留学生クラスなので講義は英語、皆が使っている教科書も英語や各々の母国語で書いてありました。自分たちの受けた薬理学の講義に比べ、総論に多くの時間を割いて丁寧に説明している印象を受けました。このクラスには約200名の学生が在籍しているとのことでしたが、実際に講義に出席している学生は100名にも満たないよう見えました(skipする学生が多いようです...)。しかし、出席している学生は大変意欲的で、先生からの問いかけに対しても多くの学生が声を出して反応していました。

7. 語学の勉強

武漢大学滞在中に、沢山の友達ことができました。中国人以外にも様々な国の友達ことができました。基本的にコミュニケーションは英語でした。英語は話すのも聞くのも決して得意ではあ

りませんが、たとえ間違いだらけの英語でも一生懸命話せば仲良くなれました。肝心なのは英語が流暢に話せるかどうかではなく、伝えようという気持ちだと思いました(もちろん流暢であるに越したことはありません！)。英語というツールを使いこなせば世界中の様々な国の人と友達になれる！ということを確認したので、これから自分の英語力を鍛えるのが楽しくなりそうです。

中国人の友達に日常的な中国語を習い、ほんの少し話せるようになりました。食堂や売店で中国語が相手に通じたときは、感激しました。

語学は日常生活の中でネイティブの相手と話すことが上達する一番の近道だと痛感しました。



フィンランド、スコットランド、バングラデシュ、タイ、日本
国籍は違っても英語で話せばみんな友達になれます！

8. 福島県立医科大学にゆかりのある先生方との出会い・再会

滞在中は、以前本学に留学された経験のある先生方に大変良くしていただきました。

昨年本学に留学されていた中南病院の馮先生は、わたしたちを武漢市内の観光に連れて行ってくださったり、中南病院の手術室や救急センターなどを見学させてくださいました。また、若いお弟子さんたちを紹介してくださるなど、おかげでわたしたちの滞在がより充実したものになりました。会食の際、『馮先生がご飯を食べているのを初めて見た』とお弟子さんたちがおっしゃっていて、馮先生が日頃どれだけ忙しいかを知りました。それにもかかわらず、お忙しいそぶりを微塵も見せず、私たちと多くの時間を一緒に過ごして下さったことに、心から感謝しました。



馮先生と、武漢長江大橋の前で

他にも、薬理学の楊教授や生理学の嚴教授、戴教授をはじめ解剖学研究室の先生方など、

初めてお会いしたにも関わらず、わたしたちが福島県立医科大学の学生だという理由だけで、温かく手厚くもてなしてくださいました。これが、1999年に交流協定を締結して以来、長年にわたって両大学の先生方や先輩方が築き上げてきた友情なのだと感じましたし、その友情が自分たちに対しても変わらず温かく深いことに、驚き、感動しました。

9. おわりに

今回の留学では、沢山の驚き・発見があり、様々な人との出会いがあり、温かい思いやりに触れ、多くのことを学びました。行く前は期待よりも不安のほうが大きかったのですが、それが嘘のように毎日が本当に楽しくて楽しくて、最後は帰りたくないとすら思っていました。こんなにも楽しく充実した時間を過ごせたのも、武漢で出会ったすべての皆様のご厚意と、長年両大学が築いてきた絆のおかげです。心の底から感謝しています。

これからも両大学の温かく深い友情が続いていくことを願っています。そして、わたしも武漢大学で皆さんに頂いた友情を、これから武漢大学からいらっしゃる皆さんに還元していきたいと思います。

本当にありがとうございました。

医学部 4年

橋本 舞

